

塔公から山を越え辿り着いた小さな村で、ただ道を通りかっただけの私を家の中に招き入れてくれたお婆さん。

これまでいったいどんな人生を歩んできたのだろう。

真っ白な長い髪を三つ編のお下げにして肩の両側にたらし、小柄な可愛いお婆さんの娘時代を想像すると、亜丁の少女、稻城のシャムウ、これまでの旅の道中で出会ってきた美しく愛らしいチベット少女達の顔が次々と浮かんでくる。高齢となった今でも少女の面影を感じさせるお婆さんの若かりし頃は、きっとずいぶん美しい少女だったに違いない。今は村で暮らすお婆さんだが、かつては遊牧民のテントで暮らし、草原で馬を駆っていた時代があったのだろうか？

部屋の片隅で黙々と針仕事を続けているお爺さんとも、映画のようなロマンスがあったのかもしれない。言葉の通じないおばあさんの笑顔を見つめていると、この世にはそこに暮らしている人の数だけ、それぞれの背負ってきた人生のドラマがあるのだと、日頃は考える事のないそんな事実がしみじみと思われて、私の頭の中ではおばあさんの人生が勝手な空想でどんどんストーリーを膨らませていた。映画の断片のようなヒトコマ、ヒトコマが頭の中に浮かんで消えていき、終いには自分が出演しているヒトコマまでをすっかり頭の中に思い浮かべて、私は一人で苦笑した。

お婆さんとは殆ど言葉が通じなかったが、互いに意思を伝え合う気持ちがあれば、不思議と言いたい事は伝わるものだ。酷く訛ってはいたが、何か話しかけてくるお婆さんが、「あなたはどこに行くの？」と尋ねているのだと理解した私がお寺の方向を指差し、顔の前で両手を合わせ拝む仕草をしてみせると、即座に意味が通じたらしいお婆さんは顔をパッと輝かせ、良いわね！といった様子で親指を立てて見せた。こんな土地でも、下界の若者と同じ仕草が通用している事がちょっぴり意外だ。

この家の穏やかな雰囲気は心地よく、小さな孫娘と遊んでいるのは楽しかったが、そろそろ午後遅い時間だった。この村から再び山を越えて明るいうちに塔公の町に戻るためには、もうおいとましなければならなかった。

お寺の話題が出たのをきっかけに、それじゃあそろそろ行ってきますと仕草で伝えると、お婆さんは笑顔で顔き、孫娘が遊んでいた私の鏡を取り上げ返してくれた。

お礼を言って別れを告げた私を、お婆さんは戸口に

立ち手を振りながらずっと見送ってしてくれた。もしかしたら、帰る時には喜捨をお願いされたりするのかな？・・・僅かだが心の片隅にそんな考えもチラッと横切っていた私は自分を恥じた。このお婆さんに会えた事で、この村は忘れられない大切な場所となった。旅が始まったばかりの頃、ある人からチベット族には他所からやって来た人間を暖かく迎え入れる、おもてなしの文化があるのだと聞いた言葉が、つくづく本当であった事を直に体験させてもらったのだ。

家の前の道を、もう間近に屋根が見えているお寺に向って歩き出した。今朝、山の上から私を呼ぶように光り輝いていたお寺だ。

思えば道もない山道を下って、この村までやってくる気にさせられたのは、何故だかこのお寺に強く心を惹かれたからだ。今朝は期待が外れた塔公で、ちょっとつまらない気分になりかけていた私を、神様がこの村に呼んでくれたのかも知れなかった。はるばる辿り着いたお寺は改装中なのか入り口では門の工事をしていたので、そこで働いていた土地のおじさんに入っても良いか尋ねて門をくぐり、薄暗い本堂の中にそっと足を踏み入れた。

この土地で寺を訪れる度いつも感じる事は、チベットのゴンパ（お寺）は異世界への入り口だという思いだ。一歩足を踏み入ると自分が現世から時空を越えて極彩色の曼荼羅世界に取り込まれてしまったような思いに囚われ、時には軽い目眩さえ感じるような心持になる。

そこは小さなお寺だったが、丁度夕刻のおつとめの時間に当たっていたのだろうか。寺の内部にはまだ修行中と思われる年若い青年僧が沢山座っており、その前には彼らの老師と思われる既にベテランとなった風格の僧侶が座っていた。

私が寺の中に足を踏み入れてから程なく年配僧に先行され彼らの読経が始まった。年配僧侶の声にリードされる様に青年僧らの声が後を追うそれは、まるでお経というよりは音楽のコーラスのように私の耳には感じられた。テンポの良い抑揚が強弱の波を打ち、次第に熱を帯びてくる僧侶達の声の張りが高揚感を増していく。

読経の合間には、木魚のような役目を果たす仏具の鐘の音が鳴り、大勢の僧の声がうねりながら堂内いっばいに渦を巻いて響き渡り、それはまるで目に見えない音のうねりがお寺の壁に描かれて躍動する毒々しいチベットの神々にも通じる、人の生の根源的なエネルギー

のほとばしりのようなものにさえ感じられた。

その場に一人部外者としてポツンと座っていた私は頭の中に反響する僧侶達の声の渦の中で、次第に意識が朦朧とした心持になって目を閉じ、音のうねりに身を預ければ頭の芯がジワジワと痺れてくるような心地良さだ。お経のリズムに合わせこれまでの旅の風景がぐるぐると走馬灯のように頭の中に浮かんで消えていく。

ああ、録音機があればいいのに・・・！この音を旅の思い出としてそのまま持ち帰りたい。

この読経のコーラスにはある種の音楽の熱気が人を酔わせる要素を持つのと同質の、何か脳内に快樂物質を生み出す作用があるようにも感じられた。お経の言葉など一切理解できない私だが、唱えている僧侶達にしてもこのテンポの良い抑揚を持ったお経を、皆で声を合わせて浪々と唱える事はさぞ心地良いものではないだろうか。宗教と娯楽は一對をなすものでは・・・？この地を訪れてから何度も思われているそんな思いが、再び頭の中を横切った。

その時の堂内は閉ざされた暗い空間だった筈だが、目を閉じていた私の記憶の中では寺の堂内にオレンジ色の夕日がいっぱいに差し込み、一身に経を唱える青年僧たちの姿を照らしているように思っていた。

お寺の堂内から外に出た私は、まだ読経のコーラスに酔っている様な気分でぼんやりしていると、先ほどお寺に入れるかの許可を尋ねたおじさんが、「小姐、帰るのかい？」と声をかけてきた。その場を立去りがたい気分だったこともあり、酔い覚ましのような気持ちで、その場で暫く話し相手をして貰った。

この辺りでも鳥葬は行われるの？

いや、この辺の人間は死んだら八美(バーメイ)に行くのさ。日本ではどうするんだい？

燃やすの。

ただ燃やすんじゃ意味がないな。鳥葬は鳥に自分の身を与える事で他の生物の役に立ち功德を積む、意味ある埋葬法だ。そうは思わないか？

男の言葉に私は深く頷いた。

ところで小姐、あんたあの山の向こうから来たんだろう？

何故知ってるの？

あんたが山を下ってくるのを見ていたよ。帰りもあの山を越えて行くつもりか？怖くないのかい？

だって誰もいないもの

狼がいるよ。

えええ!?

もう太陽の色が和らぎ始めていた。早く戻らなければ日のある内に帰れない。おじさんに別れを告げると私は早足で来た道に戻り、お婆さんには家の外からそっ



と別れを告げてこの村を後にした。

下界であれば然程でもない小さな山を、再び激しくハアハア言いながら登り返し、幸いにも狼に遭遇する事はなかったが、何処かで方向を間違えたらしく、辿り着いた山頂は今朝登った山と連なる別の峰の先端で、そこは山の斜面いっぱいにはチベット仏教の祈禱旗、ダルシンが林立して三つの大きな三角形をかたどっている、塔公のシンボルともいえる神山の山頂だった。

太陽がオレンジ色に輝いて、地平線の彼方にはこの朝遠くに見えていた雪山の連なりが赤く染まっているのが素晴らしく美しい。いつまでも眺めていたかったが、太陽が沈めば辺りは直ぐに暗くなってしまうだろう。もう時間が無かった。そのまま尾根伝いに歩けば元の山に戻る事もできたが、それよりも今立っている山の斜面を斜めに下る方が早く塔公の町に戻れると判断し、私はそのまま山を下り始めた。

山の斜面に立てられた祈禱旗はびっしりとお経が書き込まれ、風にはためくたびに仏の教えを広めるという意味が込められているのだそうだが、既に薄暗くなってきた視界の中で風雨に晒されくたびれた白い布が揺れながら林立しているダルシンの群れは、異国の人間の目には異様で恐ろしく、まるであの世の世界に迷い込んでしまったような気持ちにさせられる。

こ、怖いよ・・・。いつしか身体が萎縮して固まっている。

だが冷静に考えれば、この場所はこの旅の間中私を守り続けてくれた神様の懐の真ん中なのだ。斜面に林立する白い幟でかたどられた三角形は、それぞれが文殊菩薩、弥勒菩薩、観音菩薩の姿を現しているのだといい、自分は正にその神様の懐の真ん中に入っていた。何も怖い事など無いのだ。

オンマニベネホン、オンマニベネホン・・・

旅の間にいつの間にか覚えてしまった、チベット仏教の祈りの言葉を呟きながら、もう薄暗いダルシンの林の中を、私はゆっくりと山の斜面を下っていった。

(続く)